へ13
2483
16

へ 13 特
2483
16

癸未春
新板

市川團十郎作
陽齋豐國画

押ハ江都の長右衛門つゞ鷺丸森
梅を浪花乃西兵衛こゞ島森

一番太鼓壽乃曙 全六冊 前篇

時は寛政の江戸繪の春月
三升

京都府立図書館蔵

序一

春あけぼの東雲よりさかい頭向もあるべし。乃始ふ梅樹て。
梅ゝらの板元も。欲の教中れかゝ言ふ八幡淫をはくご神仏と
情のくゞり孔帯屋三左衛の紙より極灯の印もそれと三味の印
言その片神も「恵ゝ」味の初霜ハやの字結び孔奥勤。
人ハ藝ゝる孔紀字国屋。意ゝ乗ゝるお仲と清七ゞ名代ゝ力ゝ孔の
十所を情。而で山ゝも葡地の極市。ゝちて八則後王ゝ兎ゝ身
ゝ色孔鬼荆鬼の女房ゝゝゝ女達ゝゝい者の姫雪孔
且の弋ゝ節ゝ添手孔初日孔出ゝ梅の由ゝ孔其ゝ者の袖
助ゝ忠ゝ孝ゝの二ゝ字ゝおゝを脊ゝ七右衛ゝ左右ゝ字ゝ初閉ゝ
その袖止のうち掛ハ市伝屋ゝ孔初南内柳の流ゝ生きゝ孔桃と福
の仲の町梅ゝ孔ハ孔ゝ弄めゝ孔ゝ献ゝ打ゝゝや一番太鼓。

文政六年 癸未 初春

七代目 市川三升述

扇谷の町人
帯屋長右衛門
後ハ
雁金十郎兵衛
鬼薊清兵衛の女房
雷
あたる
元日や
まがつ
えせけつ
花勝男
高清亭
男達梅の由兵衛
後に
片岡幸左衛門
磯貝
兵助の
言号
初霜
後ハ
藝者
仲

磯貝が下部 袖助
島川太兵衛
後ふ
源平堀の
玄兵衛

秋月亭
磯貝兵助
後ふ
香具屋の清七

發端

弘安年中のころ、こゝに勇壯の
さむらひ、こゝにひやうがうのものあり。
いそぶび実ちかとゆふりのものなり。
京にちなく、一ぢ兵助とて世に名の
ひろまりのほて実ちかぶつまふさきごちて
分まうりおやまちかきんおこりうく
茶屋のあるりくくきこのあり
やまもるひるあるすゞ茶屋
あるがちまり川をまとゆふのあり
これバちやゝめのちるんすり
ぶゝめのくうまんかりそにあり
ゝるとゝのゝどもゝのにゝぶゝ
実ちかをぞんしりわりてゝまり川
とバさのゝにあがーゝやさでれバ法ゝく
ちまぶちろふおりのにハよゝのちぶと
いゝあのゝれあるゝ田ゝにとゝゝゝゝゝ
もうゝりれゝふゝきハ実ちかまゝゝとゝまゝ
いそぶひをうしゝんゝこゝひゝたゝそゝおゝる
ちゝはゝこゝびゝ実ちかをゝりゝゝゝこゝれおせゝ
ちゝはゝこゝびゝにつゝちゝるゝごゝちゝゝすゝまゝちゝ
すゝごゝいひゝちゝうゝのゝあゝれゝどゝもゝいゝまゝゝごゝちゝのゝきゝれ
あゝゝをゝちゝゝゝゝずゝさゝのゝひゝちゝゝゝぞゝくゝのゝちゝゝちゝゝゝ
ゝゝんゝおゝにゝゝゝゝゝ

影向松

奉納
市川團十郎

三
由
才

豊國画

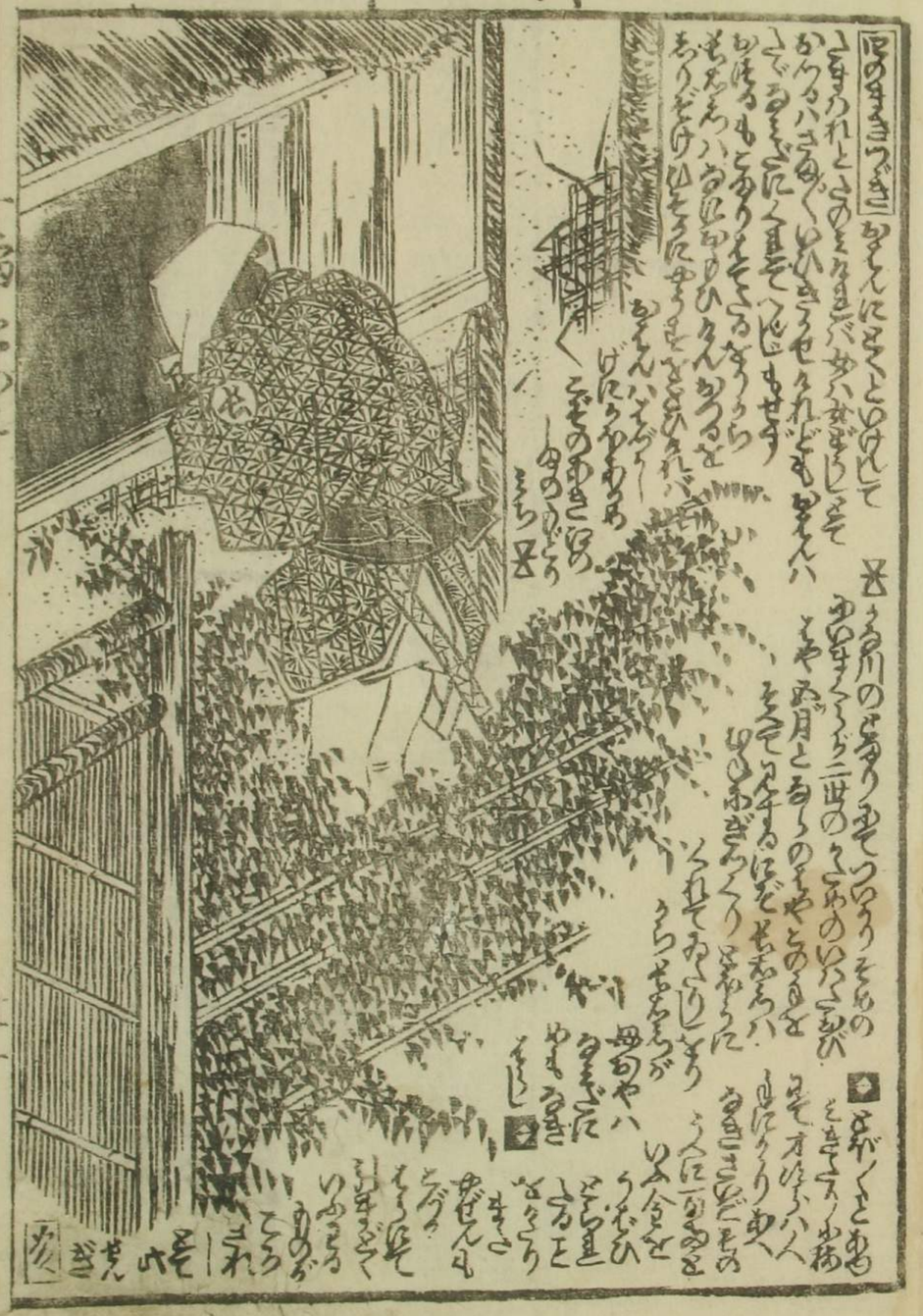
七代目 三升作

一番太鼓
善玉曙後編
三升作
豊國画
ひく波も白き
とくれなゐ梅の
西宮
春松軒
四ノ巻

常磐今春文字摺

筆耕 藍庭晋米齋
彫工 加藤利助
校合 五柳亭徳升

板 塘町通
元杉製所



右

十

新製
役者似顔
歌川豊国
五流亭徳升
哥川豊国

画盃
市川團十郎

歌川豊國画 ○ 市川團十郎作

筆者 晋米齋

文政六癸未春新鐫目録

惡賊八三大河 怨夫八三暮提 坂東太郎強盜譚 全十五冊 五冊ヅヽ進ぜ 式亭三馬作 哥川豊国画

一番太鼓春乃明保濃 全六冊 市川三升作 哥川豊国画

須磨浦の漁夫 新口村の恋歌 忍彈仇汐汲 全六冊 瀬川路考作 哥川国貞画

昔羽丹七 小糸佐七 本町育小糸苧環 全六冊 墨川亭雪麿作 北尾美丸画

契情月小夜 恩愛丸堂三郎 二重染曾我雁金 全六冊 古今亭三鳥作 北尾美丸画

茶番早合點二編 中本 全二冊 三馬作 國貞画

美艶仙女香 一包四十八銅 南天牛角三ツめ 坂東氏

地本 義太夫 抜本 錦繪問屋 江戸本材木町壹丁目 春松軒 西宮新六